

序

初期臨床研修医の君！これからマッチング先を探そうという医学生 of 君！皆さんの大部分は外科医志望ではないと思います。しかしこの研修病院を選ぼうとも来年から外科のローテーションは必修になります。「勘弁して」って感じの人もおられるでしょうね。……で、その大変そうな外科で何を学ぶべきか見当がつきますか？

本書の中にその答えがあります。

この本は初期臨床研修医を受け入れる側の外科指導医として「何を教えりゃいいのか？」という疑問から始まったものです。筆者の専門は肝胆膵外科ですが、外科は考えていないっていう研修医に何時間も肝臓や膵臓の手術で鉤引きをしてもらうのは気が引けます。しかもその間に説明するのは「この血管の名前は何？」くらいだったりします。いくら何でも時間が勿体ない…何か他に教えることはないのか？と考えました。外科医になるわけではないから高度な手術手技はいらないですよね。しかし持針器の持ち方のような基本的手技なら一生役に立ちます。身体所見からの全身評価、腹痛の診断法などもおすすめです。そして何と言っても周術期管理の知識。これは皆さんがどの専門医になっても応用できるものです。心筋梗塞や感染症をはじめとした全身的なトラブルは日常であり、そのような合併症に対処する知識を徹底的に整理することができれば、それこそ教育する価値があるだろう。そんな思いから研修医のためのテキストを書き上げました。

本書の元になるテキストは毎年、バージョンアップしながら糸魚川総合病院の研修医の皆さんに使ってきてもらいました。ありがたいことに外科の同僚も結構読んでくれています。手術患者が急速に高齢化しているからです。80歳代の膵頭十二指腸切除などの高難度手術も珍しくありません。多くの併存疾患を抱える高齢患者に周術期管理を安全に行おうとするなら、全身を診るための最新の知識は必須です。エビデンスを踏まえた知識を身につけていれば患者さんが100歳であっても合併症を予測して先手必勝の治療をすることができる。これがおもしろい！研修医ばかりでなく、患者さんを担当し始めたばかりの若き外科医や外科系 hospitalist を目指す方にとっても本書の内容は周術期管理の面白さを知るきっかけとなってくれると思います。

そして本書を参考にして外科研修する研修医の中から一人でも新たに外科医や手術患者を担当する hospitalist が生まれてくれたなら筆者としてはこれ以上の幸せはありません。

(謝辞)

本書を執筆するにあたって本当に多くの方々にお世話になりました。この場を借りて感謝申し上げます。

田澤賢一先生，澤田成朗先生をはじめとした外科の同僚，樋口清博院長をはじめとして日夜熱心に教育活動に当たってくれる糸魚川総合病院のスタッフと，研修教育をサポートしてくれる石坂裕美氏。研修教育での戦友と呼び合っている上越総合病院の籠島 充院長，大堀高志先生には循環器の章で，中頭病院集中治療科 笹野幹雄先生，入江病院 入江聰五郎先生にもそれぞれの貴重な知識を教えてくださいました。川崎幸病院 根本隆章先生には感染症の部分を，糸魚川総合病院の松尾光浩先生，水澤 圭先生，そして磯矢嵩亮先生，熊谷航一郎先生をはじめとした研修医諸君にも全般的なチェックをしていただいています。

原稿を羊土社に紹介していただいた徳田安春先生，外科学における助言をいただいている富山大学 藤井 努教授には推薦文も書いていただきました。本書の執筆を根気よくサポートしていただいた羊土社の杉田真以子，保坂早苗両氏には特に感謝いたします。最後に，励まし続けてくれた妻と二人の娘たち，そして離れて暮らす母にも感謝を伝えたいと思います。

2019年5月

糸魚川総合病院 副院長・教育研修センター長
山岸 文範